50

京都岩倉における精神病者家族的看護の衰退理由

――ベルギーのヘールとの比較において

中村　治
大阪府立大学人間社会学部

京都洛北の岩倉には、後三条天皇（位一〇六八～一〇七二年）の第三皇女が今でいうところの精神病になった時、岩倉の大雲寺の観世音に祈願し、大雲寺の井戸水を飲んでいたところ、その病が治ったという伝承があり、古くから精神病者が集まっていた。しかし江戸時代以前の岩倉に病院があったわけではない。精神病者は岩倉の農家や茶屋などに宿泊して看護されていたのである。ところが文明開化の波が押し寄せ、明治八年（一八七五）に京都癲狂院ができると、岩倉の茶屋や農家における精神病者預かりは、医療を伴っていないという理由で批判され、禁止された。京都癲狂院が明治一五年（一八八二）に財政難で閉鎖された後、岩倉の茶屋や農家における精神病者預かりが一時的に復活したこともあったが、明治三三年（一九〇〇）に精神病者監護法ができると、岩倉の茶屋や農家のような「旅宿民舎に於て猥りに狂者を監護する事を厳禁せらる」ことになったのであった。

ところが岩倉の茶屋や農家における精神病者預かりはそれでもなくならなかった。一九世紀末のヨーロッパでは、精神病者数の急増に病院建設が追いつかず、ベルギーのヘールにおいて行われていたような精神病者家族的看護の有用性がさかんに論じられていたのであるが、そのヨーロッパで研究し、明治三四年（一九〇一）に帰国して東大教授となった呉秀三が、岩倉で行われていた精神病者家族的看護を擁護したのである。そのことによって岩倉における精神病者家族的看護がすぐに認められるということはなかった。しかし精神病者数の急増に精神病院の建設がまったく追いつかなかった日本では、岩倉におけるような精神病者家族的看護がやがて黙認されるようになったのである。そして私立岩倉病院（一八八四年設立）の院長土屋栄吉も、

呉の考えを受け入れ、病院中心の近代的な精神医療を志向しつつも、岩倉に根づいた茶屋や農家における精神病者預かりを禁止せず、茶屋や農家を病院の一部として存続させる道を選んだのであった。そして大正時代末頃に保養所と改称した四軒の旧来からの茶屋に加え、新しい保養所もできて、岩倉病院の統制のもと、岩倉の保養所や農家における精神病者家族的看護は昭和初期にその最盛期を迎えた。土屋はそれについて次のように述べている。「日本に於ける家族的看護型式の精神病者コロニーとして…岩倉病院を中央療養所として、其周囲付近に大小新古八軒の精神病者看護家庭が散在し、常に総計百数十名の病者が家族の一員となりて、陽気に院外保養をしている」（一九三二年）。「［精神病者を看護する］各家族相互間には申合せ規約が存在し、凡て岩倉病院長の統制に服し、収容患者の適否、看護方衛生設備診察治療等一切その指揮を仰いで居る」（一九三〇年）。そしてそのような精神病者家族的看護は有名になり、昭和五年（一九三〇）には、ハンブルグ大学教授ヴァイガント（Wilhelm Weygandt）が岩倉を訪れ、保養所や農家における精神病者の看護に好意的な感想を残したのであった。

ところが岩倉における精神病者家族的看護は第二次世界大戦とそれにともなう食糧難などで急速に衰え、昭和二五年（一九五〇）に施行された精神衛生法によって禁止され、ほとんどなくなったのである。それゆえ保養所や農家における精神病者預かりは外的原因によって終わったようにも思われる。しかしはたしてそうなのか。岩倉病院の土屋院長、岩倉病院経営者、保養所経営者の関係にも原因はなかったのか。本発表は、岩倉における精神病者家族的看護衰退の一つの原因を土屋院長、岩倉病院経営者、保養所経営者の関係に求め、ベルギーのヘールにおける精神病者看護家庭と公立精神病院の関係との比較のもとに、ヘールにおける精神病者家族的看護が今も続いているのに、岩倉におけるそれが終わったことの理由について考察することをめざしている。